僕なんて死んでしまえ　[千文字小説]

尖角?...

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
僕なんて死んでしまえ　［千文字小説］

【Ｎコード】
Ｎ７６５２Ｘ

【作者名】
尖角？・・・

【あらすじ】
生きる価値がないから、死んでしまえ。
そう思い、そう行動する人の話。

人が一生に一度は思う、疑問の一つや二つ。

それは個人差はあれ、絶対に何かはあるだろう…。

今回の、自分の場合はこうだ↓

『人が生きる価値とはなんなのか？』

しかし、それは人それぞれ思うことは違うであろう。

ここで、自分が思う《生きる価値》というのは、《誰かに必要とされる数》である。

それは、なぜなのか？

そんなことは言わなくたってわかるのではないか？

誰かが必要な人間は、誰かから愛されるわけで、

誰にも必要とされない人間は、誰からも必要とされない。

要するに、いらない人間となり、価値のない人間となるのである。

さて、ここで問題が一つある。

果たして、君は「誰かに必要とされている」と言い切れるだろか？

自分は、決して言い切ることができない。

それは、自分自身で極力、人と関わるのを避けてきたため。

それは、《誰かに必要とされたくなかったから》だった。

なぜ、そんな行動を今まで僕が取ってきたかというと、

ただ単に、“怖かった”のである。

僕は、極度な小心者なのである。

果たして、そんな僕が誰かから必要とされるだろうか？

それは、決してないだろう？

君は“道端で出会った人間”が、“どこかであったかもしれない人間”が、“地球の反対側にいる人間”が、必ずしも必要だろうか？

答えは、決まって『ノー』だ。

ありえるわけがない。

だって、話したこともない人間に、どこの誰が興味なんて持つだろう？

君だってそうだろう？

所詮、人間なんて冷たい生き物さ。

僕らは決まって、そう口遊(くちずさ)む。

しかし、そう答えたところで、自分の中に蔓延(はびこ)る悲しみは消えない。

何をしていても、幾度となくのしかかる、“独り”という現実。

誰からも必要とされず、ただただ寂しく生きるだけの毎日。

そんな毎日で、ふと僕は思うんだ。

「なんで、昔の自分は一人で生きると誓ってしまったのだろう？」

「あぁ、僕なんて死んでしまえばいいのに…」と――――――。

だって、そう思わないかい？

生きる希望を失った挙句、生きることを必要とすらされていない。

そもそも必要としてくれるはずの友はいないし、親にだって、、、

僕はどうせ、独りなんだ。

今も、　今までも、　これからも、、、

どうせ僕は、生きている間、ずっとずっと一人なんだ。

でもいいんだ。

毎日思えば、寂しくなんてないからさ。

「僕なんて死ねばいいのに――――」

「所詮、生きる価値などないのだから――」

「どうせ、誰にも必要とされていないんだから――」

（後書き）

決して、自殺はよくないですよ。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7652x/

僕なんて死んでしまえ　[千文字小説]

2011年11月22日01時13分発行